様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　5 月 31 日現在

研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：　2007～2009
課題番号：　19520412
研究課題名（和文）英詩韻律構造の最適性理論による研究
研究課題名（英文）　An Optimality-Theoretic Approach to the Rhythmic Structure of English Verse

研究代表者
岡崎　正男（ OKAZAKI MASAO ）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：　30233315

研究成果の概要（和文）：いままで多数の先行研究がある英詩の韻律構造の研究を前提として、その（表面的な）複雑さゆえ理論的視点からあまり注目されることがなかった、Emily Dickinson（以下、Dickinson）の詩の韻律構造、わけても、韻律的倒置を中心に据えて、その実態を捉えることを目的とした。

研究の結果、以下の二つの点が明らかになった。(i) Dickinson の詩においては、初期近代英語期の詩人とは違い、韻律的倒置を限定的に使用しているのではなく、韻律的倒置を可能な限り駆使して詩作をしていたと考えられる。(ii)韻律的倒置の分布をもとにすると、Dickinson の韻律構造は、今までの先行研究で言われてきたような複雑なものではなく、四つの主な制約の優先順位により決定されており、詩行の韻律型は基本的には 4 種類であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The rhythmic structure of Emily Dickinson's poems has been said to defy generalizations because of its apparent complexity and irregularity. However, it is shown to be simple and regulated by a limited set of ranked Optimality-Theoretic constraints. In particular, four markedness constraints on the well-formedness of iambic verse lines are proposed which exhibit four different rankings. The constraints and their rankings enable us to reduce seemingly a large number of rhythmic patterns of her poems to only four patterns and prove to be plausible devices which can also capture the distribution of metrical inversion cases in other Modern English poems.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	400,000	120,000	520,000
2008 年度	300,000	90,000	390,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：近代英語、英詩、韻律、韻律的倒置、インターフェイス、最適性理論、hymn meter、Emily Dickinson

１．研究開始当初の背景

近代英語の英詩の韻律については、さまざまな立場からさまざまな提案がなされている。詩人ごとの記述研究や文体研究から最新の言語理論にもとづく韻律研究まで実に多くの研究が発表されている。

しかしながら、後期近代英語期のアメリカ合衆国の詩人である Emily Dickinson（以下、Dickinson）の詩の韻律構造については、文学的視点からの研究と記述研究はあるが、言語理論の視点からの研究がほとんどない。

Dickinson は、弱強の韻律を基本とする hymn meter を基盤としながら、それに独自のアレンジを施し、きわめて独特の韻律構造で詩作をしていると言われてきたが、その実態の本質は、いまだに明らかになっていないと言ってよい。

２．研究の目的

１に記されている背景を前提として、本研究においては、いままで試みられたことがほとんどない Emily Dickinson の詩の韻律構造を理論化し、その実態を捉えることが目的である。

具体的には、Emily Dickinson の詩の韻律構造について、いままで体系的に試みられたことがない生成音韻論的視点からの理論化、とりわけ、最適性理論の視点からの理論化、をすることが目的である。

３．研究の方法

研究方法は以下のとおりである。

(1)近代英語期の詩の韻律構造の特徴をとくに生成韻律論の領域における先行研究をもとにしてまとめる。

(2) Emily Dickinson の詩の韻律の特徴を Franklin 版のテクストにもとづき、現存する Dickinson 本人の草稿間の異同なども参考にして、近代英語期の詩人の特徴と比較しながら記述を進める。

(3) Emily Dickinson の詩の韻律特徴のうち、わけても、詩の鋳型のリズム（基底のリズム）と実際のリズム（表層のリズム）のずれに注目して記述する。基底と表層のずれのうち、とくに多音節語のリズムと基底のリズムのずれの特徴を記述して、Emily Dickinson の詩のリズムの特徴を明らかにする。

(4) (1)－(3)を基礎として、最適性理論の枠組みを援用しながら、理論化を進め、Emily Dickinson の詩のリズムの実態を明らかにする。

４．研究成果

平成19年度と平成20年度の2年間、Emily Dickinson（以下、Dickinson）の韻律構造に関する記述を積み上げ、その記述にもとづき、最終年度の平成21年度には、最適性理論にもとづく理論化を提案した。具体的な研究成果は次のようになる。

(1) Dickinsonの詩における鋳型のリズムと実際のリズムのずれ方の特異性

初期近代英語期以降の英詩においては、詩行の鋳型のリズムと実際のリズムが一定の範囲でずれることが知られている。Hymn meterを基盤としているDickinsonの詩もその例外ではないが、初期近代英語期の詩とは違った特徴がみられることは以前から知られていたが、その実態は解明されていない。

そのため、Dickinsonの詩における2音節語の分布を調べ、鋳型のＷＳの位置にＳＷの語が出現する環境と鋳型のＳＷの位置にＷＳの語が出現する環境を調査し、韻律的倒置の分布の特徴を、近代英語期Shakespeareをはじめとする他の詩人の詩における韻律的倒置の分布と比較もしながら、記述した。

その結果、Dickinsonの詩において観察される韻律的倒置には、二つの特異な特徴があることが明らかになった。まず、Dickinsonの詩においては、韻律的倒置は、行頭や文頭において生起するだけはなく、行中行末において頻繁に観察されるという特徴がある。具体例は、次の①-④である。

①行中における韻律的倒置の例

a. With our **fáces** veiled – (164.10)

W S WS W 鋳型のリズム

b. Big my **Sécret** but it's *bandaged* – (267.17)

c. On the Head that **stárted** with us – (651.3)

d.'Twas with Text and **Víllage** Singing(992.3)

②行末における韻律的倒置の例

a.This was but a **story** – (50.13)
W S W S W S 鋳型のリズム

b. I will give him all the **Dáises** (320.7)

c. When it goes, 'tis like the **Dístance** (320.15)

d. Not at home to **Cállers** (1604.1)

Dickinsonの詩におけて観察される韻律的倒置の第2の特徴は、韻律的倒置が、論理的に考えられる生起可能な環境6種類のすべて生起する、ということである。具体的には、Dickinsonの詩においては、次の6種類のすべての韻律的倒置が観察される。

	鋳型のリズム		実際のリズム
③ a.	SWS	⇔	…σ[#SW#]
b.	SWS	⇔	…σ# [#SW#]
c.	SWS	⇔	…σ[#S#] W
d.	SWS	⇔	…σ# [#S#] W
e.	SWS	⇔	…σ[#S#W#]
f.	SWS	⇔	…σ# [#S##W#]
g.	SW	⇔	[#WS#]

注：σ=音節；　#=語境界

③a-fが、鋳型のWSが実際のリズムのSWに対応している6種類の場合であり、③gが鋳型のSWが実際のリズムのWSに対応している場合である。それぞれの具体例は、次④a-gである。

④ WS ⇔ SW

a. With [our [#**fáces**#] veiled – (=(①a))
W S W S W

b. [Her#Green#[#**Péople**#] recollect it] –
W S W S W S W S (457.3)

c. None may [#**téach**#**it**] – **Ány** – (320.9)
W S W S W S

d. "Houses " – so the Wise #Men#[**téll**#**me**] –
W S W S W S W S

(139.1)
e. Past the houses – past [the [#**héad**##**lands**#]] –
W S W S W S W S (143.3)
f. And #old# [#**sún**##**shine**#] – about – (362.2)
W S W S W S
g. Could **behóld** so far a Creature – (762.27)
W S W S W S W S

(2) 生成音韻論的視点からの形式的側面の理論化

以上の記述をもとにして、Dickinson の韻律的倒置の分布を捉えることになるが、さまざま考えられる韻律的倒置の原因のうち、Dickinson の詩における韻律的倒置は、純粋な音韻情報により決定されていると考えられる。

Dickinson の詩においては、韻律的倒置の分布は、詩全体にかかわる統一的な原理により決定されているわけではなく、詩行ごとのリズムに課される一定数の制約により決定されていると考えられる。そして、複数の制約間の優先順位を設定して説明するのが最も適切な方法である。

具体的には、Dickinson の詩においては、4 種類の制約があると考えられ、それらの制約の優先順位の変異により、個々の詩行の適格性が決定されていることが明らかになった。

具体的な制約群は以下のとおりである。

⑤ 制約群
a. MATCH STRESS : *S ⇔W; *W ⇔S
b. FILL STRONG POSITIONS: *S ⇔ ϕ
c. NO CLASH: *SS
d. NO FOURTH PAEON: *WWWS
e. NO DACTYL : *SWW
f. NO ANAPEST : *WWS

これらの制約は、a と b が忠実性制約であり、c-f が有標性制約である。そして、これらの制約には、以下のような優先順位があると考えられる。

⑥ {c, d, e, f}>> a >> b

c-f に優先順位がつけられていないのは、個々の詩行ごとに、これらの制約から一つが選択されて、他の制約が無関係になることを意味している。

それぞれの制約により説明される詩行には以下のようなものがある。

⑦c が作用しているもの
With our **fáces** veiled – (164.10)
⑧d が作用しているもの
Can the **écstasy** define (95.2)
⑨e が作用しているもの
Are **prepáred** to go! (164.20)
⑩f が作用しているもの
Big my **sécret** but it's bandaged – (267.17)

まず⑦では、太字の部分で鋳型の WS の位置に SW の語が配置されているが、この部分に鋳型と一致している WS の語が配置されると、WSS というリズムが実現してしまい、veil のもつ語強勢との衝突が生じる。その衝突を避けるために韻律的倒置が生じていると考えられる。

⑧－⑩についても同様に説明される。⑧では、太字の ecstasy の最初の 2 音節が倒置を起こしているが、この部分に鋳型と一致している語が生じると、行頭に WWWS というリズムが実現する。このリズムをさけるために、当該箇所で韻律的倒置が生じる。⑨では、太字の当該箇所で韻律倒置が生じないとすると、行中に SWW というリズムが実現するが、それを避けるために韻律的倒置が生じている。最後に⑩では、太字の当該箇所で韻律的倒置が生じないと、直前の my も含めて WWS というリズムが実現するため、それを避けるために韻律的倒置が生じていると考えられる。

以上が、提案⑥にもとづいた具体例の説明であるが、この提案に従えば、Dickinson の詩においては、詩行ごとにそのリズムを決定している原則が違っていることになる。また、同時に、詩行ごとにリズムを決定する原則が違っているにもかかわらず、リズムの決定に関わっている制約は 4 種類しかない、ということにも注目すべきである。

(3) 韻律的倒置の談話上の役割

(2)においては、Dickinson の詩における韻律的倒置の形式的特徴について述べたが、Dickinson の詩においては、韻律的倒置は、詩の談話上重要な役割を担っていると考えられることも明らかになった。

韻律的倒置とは、先にも述べたように、詩の抽象的なリズムの鋳型と実際のリズムとのミスマッチをさしているが、このミスマッチが、談話上重要な役割を果たしている。

具体的には、次のようにまとめることができる。

⑪ Dickinson の詩において、行中もしくは行末において韻律的倒置を示している語は、詩の談話上のキーワードの役割を担っている。

韻律的倒置のこの談話上の役割も Dickinson の詩の韻律の特異性の一つとしてみなしてよい。というのも、特に、初期近代英語期の詩における韻律的倒置については、たとえそれが行中もしくは行末において生じているとしても、⑪にまとめられているような具体的な役割はない、と考

えられるからである。

本研究においては、⑪にまとめられている Dickinson の詩における韻律的倒置の特別な役割は、有標な形式の機能特化の具体例の一つとしてみなすことができる、と主張する。すなわち、韻律的な倒置は、詩行の抽象的な鋳型のリズムと実際の語のリズムがずれているという点で、有標な形式とみなすことができる。そして、有標な形式ゆえに、鋳型と実際のリズムとのずれがない場合よりも「目立つ」韻律型が実現される。「目立つ」韻律型の実現が、談話上のキーワードを役割を担うように機能特化したと考えられる。

Dickinson の詩における韻律的倒置の機能特化は、一見すると、奇妙な現象に見えるかもしれないが、広い視点から見るとそれほど珍しいものではない。この機能特化は、文レベルにおいて、有標な語順を示す文が機能特化を起こし、談話上の役割が特定化される現象と平行的なものである。具体例としては、現代英語の分裂文、話題化、there 構文などの談話上での機能の特化が挙げられるが、詩の韻律の有標的なパターンについても平行的なことが言えるといってよい。

(4)提案の意味合い

以上のように、本研究においては、Dickinson の詩における韻律的倒置の特異な分布特性とその談話上の特異な機能について、提案を行った。

まず、韻律的倒置の分布特性を明らかにすることにより、個々の詩行ごとに制約の優先順位が違っていることが明らかになった。そして、4 種類の制約とその優先順位を設定することにより、詩行ごとのリズムの特性を決定できると考えられる。このような韻律特性をもっている詩は、英語の詩のなかでも稀有な例といえるが、その特性を背後から支えている原則は決して特異なものではない、ということが重要である。

また、もし、本研究の提案が正しいとすると、いままでの研究において、一般化を阻むものと考えられてきた Dickinson の詩の韻律構造は、無限に近いパターンが存在しているわけではなく、4 種類のパターンに還元できる可能性が極めて高いことになる。

この結論は、いままでの Dickinson の韻律に関する先行研究と比較すると、設定している制約が妥当である限り、格段の一般性を捉えていると言ってよい。

次に、韻律的倒置の談話上の特性についても理論的な意味合いがある。従来、韻律的倒置は、初期近代英語期の詩においては、行頭もしくは文頭に生じることが圧倒的に多いと考えられてきたため、韻律上の純粋に形式的な技法としてみなされてきた。そのため、その詩の談話上の機能については、ほとんど考察がなされていないといってよい。

しかしながら、Dickinson の詩においては、韻律的倒置の分布の特異性とその出現頻度の高さゆえ、単なる韻律上の技法にとどまらない機能があると考えざるをえない。詩の談話を、詩のテーマと突き合わせながら分析してゆくことにより、⑪の結論に至りついたわけであるが、これは、詩の韻律とその役割の対応関係の研究に対して、今までにない具体的な提案をしていることになる。そして、⑪の背後にあるのは、一般の言語活動において観察される原理とまったく同じ原理が作用していると考えられることもひじょうに重要な点である。

以上のように、本研究は、詩の韻律の形式的側面とその談話上の役割について、新しい提案をしていることになり、今後の英詩の言語学的視点からの韻律研究の進展に寄与するものであると考えられる。また、詩の文学研究の基礎となるテキスト分析に対する貢献が大きいと考えられる。

(5) 事例研究

本研究において、Dickinson の詩においては、韻律的倒置が行中と行末において高い頻度で観察されることを指摘し、理論化を提案したが、その提案の視点から他の詩人の詩における、行中と行末における韻律的倒置の分布を調査した。

その結果、William Shakespeare, John Donne, そして Robert Frost などの詩人の詩においても行中と行末における韻律的倒置が低くない頻度で観察されることが明らかになった。これは、従来の韻律研究の視点ではっきりとしなかったことである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計１件）

<u>岡崎正男</u>『英詩韻律構造の最適性理論による分析』（冊子体研究成果報告書）平成 22 年 2 月。66 ページ。

６．研究組織

(1)研究代表者

岡崎　正男（OKZAKI MASAO）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：30233315